

V 日高振興局

1. 援農希望者に梅のせん定研修会を開催

みなべ町では、梅生産者の高齢化や担い手の減少等により、農繁期（収穫、せん定等）の労働力不足が問題となっている。

2月4日、農業水産振興課は、みなべ町内の援農支援会社「アグリナジカン」（代表：山下丈太氏）や若手農家（4名）と連携し、援農希望者を対象とした梅のせん定研修会をみなべ町清川地区で開催した。この取組は、援農希望者が梅のせん定技術や知識を習得することにより、梅生産者の支援に繋げることを目的としている。

援農希望者は京都府や那智勝浦町出身の計3名で、いずれも梅のせん定は初めてであったが、熱心に研修し基本的な技術や知識を身につけることができた。

援農希望者からは、「今後は農家のせん定作業の助手として経験を積んで、早く一人前になりたい」との声が聞かれた。

今後も、関係機関と連携し、労働力不足の解消に向けた取組を支援していく。



梅のせん定を指導

2. スターチスの種苗費削減に繋がる育苗技術の現地実証

農業水産振興課では、スターチスの種苗費削減による産地の強化に取り組んでおり、その一環として、日高野菜花き技術者協議会（以下、協議会）と協力して暖地園芸センターが開発した常温育苗技術^{*1}の現地実証を行っている。今年度は、御坊市と印南町の2カ所に実証ほを設置し、県育成の「紀州ファインバイオレット」と「紀州ファインラベンダー」について固化培地^{*2}を利用した常温育苗とセルトレイによるクーラー育苗の生育や収量を調査した。

2月26日、協議会花き部会で現地検討会を実施し部会員及び生産者12名が参加、常温育苗区ではクーラー育苗より約20%多く切り花本数が得られることを確認できた。実証ほ設置農家からは、「常温育苗は生育も良く、今後クーラー施設が使えなくなった場合に導入を考えている」との声があった。一方、JA職員からは「現場では、実際に農家が常温育苗を行った前例がないため、導入に向けて慎重に対応していきたい」との意見もあった。

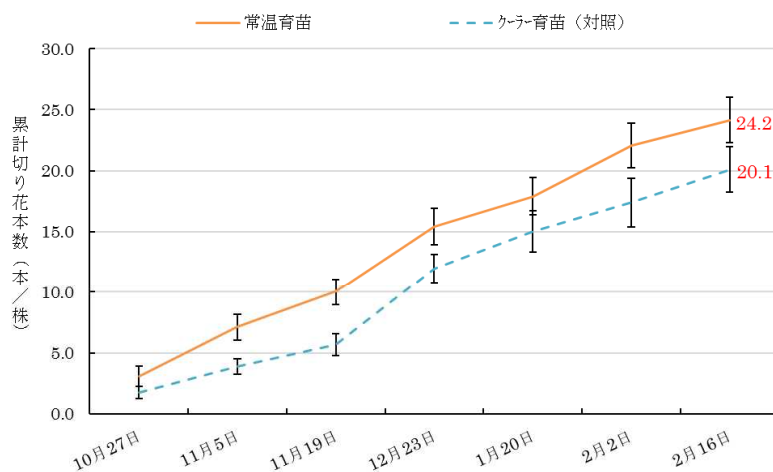
3か年の現地実証の結果を踏まえ、生産者への周知に努めるとともに、導入を考えている農家に対して技術的な支援や情報提供を行い普及に移していきたい。

*1：無加温雨よけ施設のもとで空調設備などを使わず、成り行き気温条件で育苗すること

*2：ポリエステル繊維や不織布などで培土が崩れないように成型した培地



実証ほにおける現地検討会



3. 日高地方生活研究グループ連協が学校栄養教諭にアカモク料理レシピを紹介

2月15日、印南町公民館で日高地方生活研究グループ連絡協議会（会長：後藤明子氏）が日高地方学校栄養士研究会の会合に出席し、アカモク料理レシピを紹介した。

昨年2月に同研究会の栄養教諭からアカモク料理のレシピがあれば欲しいとの意見があり、今回協議会の役員がレシピを考案した。

最初に、後藤会長が役員が考案した料理レシピ12品について、調理方法や作り方等を説明した。

さらに、昨年紀州日高漁協のアカモク担当者とおさかなママさん*¹から教わった、納豆やオクラ、山芋などのネバネバ成分のものと相性が良いことや、アカモク自体に味がないので味の濃いものやドレッシングなどに使ってもよいことを栄養教諭に伝えた。

また、栄養教諭からは、「学校給食にアカモクを取り入れてみたいが、高価で使えない」、「新しい食材を入れる場合、他の教諭の理解が得られなければ難しい」などの意見があった。

後日、漁協担当者にこの意見を伝えたところ、アカモクを使ってみたいと考えている栄養教諭に無償提供してもらえることとなった。

今後も当協議会は、栄養教諭や漁協とも連携しながら食育を推進していくこととしており、農業水産振興課としても活動を支援していく。

*1：調理学・衛生管理などの知識をもった部員を、和歌山県漁協女性部連合会が「おさかなママさん」として登録している。



日高地方学校栄養士研究会